

79 《聖マタイの召命》 バロック・リアリズムの真髓

身体動作を追いかけ、劇的な物語の結果を味わう新絵画

2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》1599-1600 カラヴァッジョ

1 身体動作を追いかけると、何が起こるのか

カラヴァッジョは、バロック画家の開祖と解説されているが、その意味を正確に理解する人は、実は、少ないのではないだろうか。

確かに、モデルを使って、見えている現実を描いたなら、リアルである。

問題は、そのリアルな身体動作が連続したとき、目の前にどのような情景が見えるか、ということだろう。

連続するリアルな身体動作は、動画を生む。パラパラ漫画ほどに滑らかではないが、脳内では物語の連続した動画が組み立てられる。

カラヴァッジョの《聖マタイの召命》を前にして、ローマの民衆はこれを体験した。もちろん、スジが読めた鑑賞者だけがこれを体験出来たのだ。

身体動作を順に読み取ることが出来て、最後に召命対象者マタイに到達するのだ。つまり、【劇的な結末の衝撃を味わう新絵画】こそが、バロック・リアリズム絵画なのだ。

従って、この絵画作品を初めて見た瞬間には、誰がイエスに呼ばれたのか、誰にも分からないのだ。

観衆の目の前の絵画を読み取ると、同時進行で、その行為を通して、心の中に映画のような活劇動画となり、リアルに物語が流れる場面に遭遇する錯覚に囚われるのだ。

これは、映画のない当時の人にとっては、《聖マタイの召命》は驚愕の新絵画体験だ。

では、逆に、【身体動作を部分的にしか読めない場合】は、どういう答えを出すのか。

1) イエスの不確かな身体動作の右手・髭男の人差し指のみ見る場合

↓
イエスの指差し動作が不鮮明なので、髭男が人差し指で、問い返した瞬間だ。

↓
結論：座った髭男がマタイだ。(誤判断)

* 悲しいほどに、絵を見ていない。 解説を他者に求め、自分の目では絵画を見ていない。

* 情景が動画にならず、スナップ写真のような静止空間と感じている。

17世紀前半に於いて、暗い聖堂内部で、初めてこの絵を見た圧倒的多数の聖堂来訪者は、恐らく、この状態であったのだろう。

当然、聖堂の関係者に対して、誰がマタイか周囲に訊ねたに違いない。しかし、聖堂の関係者にも分からない。単純化された解答とは、上記の内容であった可能性は、かなり高い。

この状態が重なると、やがて、誤解釈が一人歩きしてしまうことになる。

そして、21世紀になり、絵画音痴（絵痴）の人々に溢れた現代社会に於い

では、この状態から脱皮できない。

では、カラヴァッジョの描いた真実のストーリーは何だろう。

イエスは、収税所の窓越しに座っているマタイの姿を見る。イエスは誰がマタイかを最初から知っているのだ。イエス一行が入り口に迂回してドアを開け、収税所に入った所から物語が開始する。この場面のストーリーは、イエスの不鮮明な指さし動作から始まるのではなく、イエスの視線を感じた髭の男の質問動作から始まる。『お探しの人は、私ですか、それとも隣の眼鏡の人ですか』という二段階の質問を、親指と人差し指の動作で行う。力の籠った親指の表現を見逃してはならない。つまりキャンバス上に描かれているのは、【二段階連続質問動作】の完結した瞬間だ。また、髭男の人差し指の方向は、デッサン上明らかに隣の眼鏡男だ。決して俯いた若者ではない。何故なら若者は髭男の45度斜め前に着席しているので、仮に指さすならば、その指は《短縮法》で短く描くのでなければ、デッサン上誤っていることになる。質問を受けたイエスは、まず左手で質問を受容する。【その理由は、イエスの左手は開かれた状態で髭男に向けられているからだ】。次にイエスは左に一步踏み出す。【その挙動の理由は、目指している眼鏡男の顔が見えるよう、自らの視点を移動する為だ。】次に右手を上段から振り回すように、《向こう側を示す動作》を行う。ここまで【三段階の連続回答動作】でとなる。お分かりのように、【イエスの右手は人を指さす動作でないのだ】。手首に力を込めず、指先も力を込めていないが、実際は誰が同じ動作を行っても、少しだけ人差し指が前の位置になるのだ。《上段からボールを投げるように廻したイエスの右手》は、イエスの見ている眼鏡男の顔附近の位置で止められる。【この動作を誰が真似ても、上段から振り下ろした手首は、呼び出す相手の顔附近で止まる。】そしてイエスは【眼鏡の男】に言う。『私に従いなさい』それを聞いた俯いた若者の上司収税人たる【眼鏡の男】は、机に寄り掛かった3点支持体勢から、直ぐに上体を起こしてイエス一行に従う。この【眼鏡の男は両足のみで立っているのではなく、机に寄り掛かっている】ので、ことばの定義上、立っているのではない。新約聖書の記述にも全く矛盾しないのだ。聖書が《立ちあがって》と記述した通りに、カラヴァッジョは《上体を上げて立ち上かつ》という意味で描いている。

バロック・リアリズム絵画は、周到に計画され、リアルに描かれた身体動作を順に読み取りつつ、新たに発見される目の前の展開を味わい、最後に衝撃的

な結果に出会うという、新絵画体験にその真髓があった、ということだ。

【マタイは髭の男、あるいは俯いた若い収税人だと考えていた多くの人】は、一刻も早く、正しい読み取りに到達し、その真髓を発見すべきだろう。

そうすれば、バロック・リアリズム絵画を切り開いた大画家カラヴァッジョの真の実力が理解できるに違いない。